

一年で一番美しい田園風景が広がる季節がやってきました。今年は、特に米騒動で騒がれているだけに、田んぼを見る目が違います。そうです、田んぼに水が入り、鏡のように輝いている田んぼの風景。そして、夜には、お話「カンタさまのいびき」のように、カエルの大合唱。そんな日本の原風景が展開される季節の中、田植えの始まった田園風景の中、子供たちは、毎日、畑 畔 森、林 草原、野原などを元気に歩き回っています。

働く大人たちも、一番忙しい季節であり、田んぼ、畑、果樹園で、皆、躍動感溢れる動きです。こうして、土にまみれて働いている環境の中で、暮らす子供たちは幸せだと感じます。

4 月初めの土づくりから、田植えまでの お米の苗づくり。ハウスに種を撒いてからの、水や温度の朝晩の毎日の管理。以前大失敗したことがあり、出産を待つドキドキのように 無事に芽が出て、そして育ってくれるか と、毎日ハウスを覗く日々。そして、無事、田植えが終了したら、保水が大丈夫かと、朝夕水回りして、それから、チェーン除草の心配などなど。コメ不足の心配から、コメの育ちが気になる昨今。気が付くと、コメをはじめ作物の栽培、成長は、まさに、子供のそれと同じだと、強く感じている毎日です。

4 月に新学期を迎え、新しい環境に不安をもちながら、日毎に大地になじみ、笑顔が増え、躍動感に溢れていく毎日。坂道傾斜のある大地特有の地形を毎日歩き、雨風関係なく午前中は、外で活動し、午後は、室内で過ごす毎日。一人一人が、日毎に大きくなっていく姿は、よく見れば、4 月からの稲の誕生、成長にそっくりです。

この春の季節、万物が 生まれ、躍動感溢れて成長していく姿は、何と言っても、**春だからです！！**

猛暑が当たり前になった日本、まもなく猛暑がやってくるでしょう。一番快適で、身体も軽やかな、そして深緑美しい季節、そして、一番日が長い季節、早起きして、朝の躍動感溢れる中で、スタートして、全力で、春を過ごしていきましょう。



【寡黙の力】

その人とは、20 年弱の付き合いがあったが、しっかりと会話した記憶はほとんどない。3000 メートル級の縦走登山やスキーツアーで昼夜一緒に過ごしても、深い会話などもなかった。数年前、ラグビーで笑わない男で有名になったラグーマンがいたが、まさにそんな人であった。が、その存在感 影が大きかった。その人の妻は、正反対で、いつも明るくエネルギー的な人で、青ちゃんのベスト 3 の尊敬する中での一人（夫婦）であった。

大地が開園して、まだまだ周囲の森林やスロープの間伐などの環境整備の毎日。連日連夜、間伐して、その木や枝を片づける毎日。子供たちが帰ってから間伐し、翌朝子供たちがやってくるまでに、片づけきれいにしておかなければならない日々。草刈りや間伐は、やるのは簡単だが、片づけは、その 3 倍以上はかかる。だから、散らばっている枝 樹木を見るだけでため息がでる。そんな毎日の中、ある日、朝起きてみると、昨日の木や枝が片付いている。まるで、小人の靴屋のようだった……。後で知ったことだが、その小人は、その夫婦であった。

その人の妻は、目が不自由だったから、大地への届け物や農産物や大地の子供たちへの贈り物を、妻に代わって、その人が、頻繁に届けてくれた。青ちゃんは、早朝から遅くまで、外で働くのが日課なのだが、どういうわけか、いつの間にか、その荷物が置かれていたり届けられている。朝、畑から、その人の車や歩く姿を見かけたことがあり、急いでお礼を言おうと駆けつけても、すでに姿はないことが多かった。

その妻から、ある日 一冊の本を受け取った。夫からの本であると。「父は空 母は大地」 有名なシアトル首長の美しい地球の未来を願う普遍的なメッセージ。シアトル首長は、「どうしたら空や大地を買えるのだろうか？」「あらゆるものがつながっている」と。この本が、その人との一番の会話であったかもしれない。

もしかすると、その人は、この本を原語で読んだかもしれない。英語の教師であったからこそ、この本を見つけたのかもしれない（想像であるが）。そして、その妻からこんな話も聞いた。夫は、教師だが、教師の研修会や勉強会には出席しない。教師たちから学ぶことはない。子供たちから学ぶことが全てだからと言っている。

雨の中の白馬三山縦走キャンプ。その家族と 4 日間共にした。白馬岳頂上直下のキャンプ場で、終日雨に見舞われ、ずっと一つの大型テント内で過ごした。テント内では、ずっと、絵しりとりで、一日中過ごした。その人は、ずっとにやにやしているだけであったが、その存在感は、まさに 空のようであった。

その夫婦の息子が中 3 の時か、職場体験として、ほとんどの中学生たちが、近隣のお店や工場などに行く中、その息子は山小屋へ行きたいと言う。学校でも、家から通える所が条件だと言うし、山小屋も、中学生なので、保護者が一緒にでないと無理だと言う中、それでは、山小屋のキャンプ場に、テントを一週間張り、ここに家族が過ごし、ここから山小屋に通えば問題なし ということ、見事にクリア。そのキャンプ場まで、その人は、大きなテントを含めた膨大な食料装備を、日帰りで運び、日帰りで撤収したらしい。その山小屋は、娘夫婦の勤務していた薬師岳太郎平小屋である。

その妻は、目が不自由であり、車の運転ができない中で、大地への 3 年間、牟礼駅から毎日長女と共に、歩いて通園し続けた。タクシーの運転手、道路沿いに住む人々、農家の人々たち全てが、この親子の通園姿を見守った。そして、乗っていくか？ と声をかけられても、この目が見える間は、全ての光景を見ておきたいと言って、車には乗らなかった。特別な行事以外は、夫に乗せてきてもらうこともなかった。きっと、その人は、妻の気持ちがわかっていたのだろう。ただ、青ちゃんの軽トラに出会い、荷台に乗っていけ！？と誘った時だけは、必ず乗って、荷台で叫んでいた。

そして、数年前に その妻は視界を失った。その前後から、その妻はマラソンを始めた。もちろん、その人と一緒に手を取り合って走っている、毎日 10 キロぐらい夜走り、雨の日は、ジムで走っている などと、嬉しそうに報告してくれた。小布施マラソンに出るという報告を受け、そっと見に出かけた。たくさんの出場者の中で、待つど暮らせど見つけることは不可能だと思われたが、手をつないで走る夫婦をやはり見つけることができ、声をかけたら、青ちゃんありがとう と言う声が返ってきた。これが、青ちゃんにとってのマラソンの最初で最後の夫婦での姿であった。その人が、その妻を、どんなに支え続けてきたかを見ることができた瞬間であった。

5 月 11 日朝 4 時、携帯電話が鳴った。翌日 通夜でその人に会った。そして、出会って 20 年弱、はじめて真剣に怒鳴り、そして 会話した。〇〇さん ふざけんなよ！！ 〇〇さんほど、かつこいい人はいないよ。まさに父は空 母は大地 だよと。そして、文庫から拝借してきたその本を枕元に添えた。

この童を書いた夕方、その妻から電話。その人の父親が、通夜にその本を 20 分間、枕元でずっと静かに読んでいたと。

